

学びの架け橋

第5号

R7.11.19発行

発行者

岡谷市教育委員会

今回の話題

幼児期と小学校をつなぐ「架け橋期」の教育

「おかやのまちじゅう学園化構想」を推進する視点の一つに「市内全域への小中一貫教育の基盤づくり」を挙げています。小学一年生から中学三年生まで、それぞれの発達段階に応じつつ、各小中学校での学びが連続的・関連的に展開されることを目指しています。これは、それぞれの学校における教育課程（カリキュラム）が明

確なねらいのもとに展開されていくための、いわゆるカリキュラムマネジメントの視点からも大変重要で、小-中間と同様、園-小間においても同じことが言えます。それぞれの保育園や幼稚園で大事にされてきたことが、入学先の小学校でも引き継がれていくこと。それが子どもたちの“学びやすさ”につながり、ひいては小中一貫教育の重要な基盤づくりにもなります。

今回は、それぞれの園で大切にされている「遊び」を切り口とし、それが学校における「学び」にどうつながっていくのかを考えてみたいと思います。

「おかやのまちじゅう学園化構想」

- (1) 市内小中学校の学校群化
- (2) 訪問型交流とネットワーク型交流のスタイル構築
- (3) おかや絹結プログラムの充実と実践
- (4) 新岡谷版コミュニティ・スクールへの移行
- (5) 市内全域への小中一貫教育の基盤づくり

水遊びに没頭する男の子

まだ暑かった夏の頃、市内のある保育園での一場面。この日は天気もよく、子どもたちは園庭に出て、それぞれ自分の好きな遊びに興じていました。園庭のあちらこちらには、先生方が準備してくださった様々な“遊びのコーナー”があり、子どもたちの興味を引きそうな魅力的な遊び道具がさりげなく置かれていました。さっそくそれらを手に取る子どもたち。そこから子どもたちの独創的な遊びが展開されていきます。

一人の男の子は、赤・黄・青の色水が入った大きなペットボトルとたくさん用意された透明のプラスチックコップを前に、色水遊びを始めました。赤色色水が入ったペットボトルを両手で持ち、プラスチックコップに注ぎます。コップがいっぱいになって色水が溢れますが男の子は注ぐのをやめません。机の上が赤色水で水浸しになったのを確かめるようにして、次に黄色のペットボトルを手にしました。赤色水で満たされたコップにさらに黄色の水を注ぎます。当然のように水は溢れますが、コップの中の水は赤から次第にオレンジ色に変わっていききました。となりで見ていた女の子が「オレンジジュースみたい!」と感嘆の声を上げましたが、男の子は頓着無くそのコップの水を机の上にあけてしまいました。そして今度は青色水でコップを満たすと、そこにさっきと同じように黄色の水をつぎ足していきます。

同じようなことを延々と繰り返す男の子。それを近くで見ながら、次第に一緒に手を出し始めた女の子。そして、その活動や子どもたちの関わりを温かく見守る先生。

男の子は水遊びに没頭する中で、色水の色が変わっていく面白さやコップから溢れる水の躍動感、ペットボトルから指先に伝わる振動などを楽しんでいるように見えました。



「遊び」は「学び」の原点

「遊び」は、子どもにとって単なる楽しみではなく、「学び」の出発点です。前述の男の子も、この水遊びから、

- ア)興味をもったことがらに集中して取り組むこと
- イ)友だちと仲良く遊ぶこと
- ウ)色と色が混ざると他の色に変わること
- エ)コップやペットボトルに入る水の量に違いがあること

などを体感を通して学ぶ機会になっていたと考えられます。ア)やイ)は非認知能力、ウ)やエ)は認知能力の基盤にもなります。

令和5年2月に中央教育審議会の特別委員会がまとめた報告「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について」では、幼稚園・保育園と小学校をつなぐ“架け橋期”において、遊びを通した学びを大切にすることが強く提案されています。

幼児期の教育では、子どもたちは遊びの中で多くのことを学びます。友達と協力したり、思い通りにならない経験をしたりしながら、「どうしたらうまくいくかな」「次はこうしてみよう」と考えを深めていきます。これこそが、後の学習につながる「学びに向かう力」です。文字や数を早く覚えるよりも、こうした意欲・思考・人との関わりが育つことが、将来の学びの土台になるのです。

ところが、小学校に入ると、「勉強」という言葉が前面に出て、「遊び」は学びとは別のもののように感じられがちです。しかし、実際には、入学直後の子どもたちは、まだ遊びの中で学ぶことが自然な発達段階にあります。そのため、上記報告では、小学校においても、幼児期の学びを理解し、遊びや体験を取り入れた学びの場づくりが大切だとされています。たとえば、身近なものを使った活動や、友達と一緒に考える課題など、子どもの「やってみたい！」という気持ちを引き出す授業が求められています。

園小連携の必要性和重要性

このように、「遊び」と「学び」は切り離せるものではなく、遊びの中にこそ学びがあるという考え方が、これからの教育の柱になります。子どもが主体的に関わり、自分で考え、試し、失敗しながら再び挑戦する。その積み重ねが、学ぶ楽しさと自信を育てていくのです。

この「遊びを通した学び」を支えるためには、幼稚園・保育園と小学校の職員が、お互いの教育のねらいを理解し合い、子どもの姿を共有することが欠かせません。幼児期にどんな遊びや活動を楽しんでいたかを小学校側が知ることで、入学後の学びをよりスムーズに進めることができます。

岡谷市では「おかや絹結プログラム」（※「学びの架け橋」第3号参照）の実践にともない、園での活動の様子を「つなぎシート」を活用して小学校教職員と共有する取組を進めています。また、園小の職員が互いに子どもの様子を参観し合うことも大切にしています。

家庭や地域の関わり

家庭や地域の理解も重要です。子どもが遊んでいる姿を見て「ただ遊んでいる」と思わず、「今、どんなことを考えているのかな?」「どんな工夫をしているのかな?」と見守ることが、子どもの成長を支える第一歩になります。

上記報告では、こうした考えをもとに、地域ぐるみで「遊びを通した学び」を支え、幼児期から小学校への接続をなめらかにしていくことが提案されています。遊びは、子どもの心を育て、学ぶ力を育てるもの。子どもたちが「学んで楽しい!」と感じながら成長できるよう、社会全体で支えていくことが大切です。